
流星のロックマン4 ~the planet~

galaxy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン4～the planet～

【著者名】

ZZード

N7316W

【作者名】

galaxy

【あらすじ】

メテオGの事件から数ヶ月がたち、6年生になったスバルたち。しかし、地球上に4度目の危機が迫る！果たして惑星の守護者たちの侵略をとめられるのか？ミソラとの関係は？蒼き流星が今立ち上がる！！！

～プロローグ～（前書き）

下手ですが、よろしくお願ひします。
キャラ崩壊するかもしれません。

「プロローグ」

（太陽系中心部）

「そろそろ、太陽系の電波の周波数も変えなければな・・・ほぼ全宇宙で変えて いるからな・・・より良い環境のために・・・」

低く威厳のある声が響く。

「そんなことしたら、地球は・・・」

「うるさい、お前は黙つて聞いていればよいのだ、アースよ・・・」

さつきの声の主はアースといつらじい。

アースはしばらく考えた。

「・・・でも、私にはできません、そんな事！」

「フフフ・・・それなら仕方ない、マークリーにやりせよつ・・・俺の命令に 従わないお前にはここで消えてもらおう・・・！」

「くつ！」

攻撃を少しきらつたものの、すぐに、アースは眩しい光とともにこの消えてしまつた。

「奴を追えつ！マークリー！周波数を変えないなら、奴の星もろとも破壊して やれ・・・！」

「はつ！！！」

アースと同じようにマークリーも消えた。

「アースよ！私に逆らつた罰を思い知るがいい！」

「スバル、起きなさい！」

「はい」

「スバル、起きなさい！」

「はい」

スバルは今日から6年生として、最後の小学校生活を送ろうとしていた。

スバルももう6年生か

この人は星河大吾といいスバル

方不明になつていった。

早いわねえ・・・」

この人はスバルの母親で、星河あかねだ。

5分くらいたつて、スバルがリビングに来た

「忘れ物してない？大丈夫？」

「大丈夫だよ、ね？ 口ヅケ？」

「ああ、おふくろ、スバルのやつ、何回も確認してたぜ」

このバケモノみたいなのはウオーロックと書いてAM星人で、今

はスルリの「」
サリにかこの「」ハ

廣雅

卷之三

卷之二

六
十九

はし 新ししノノノノノノノノ

ありがとう。早速、お口のケを移重しないといくよ。

۱۱۸

卷之三

一〇六

凡 例

力吾 これ起慨通たる一サノ生ニ

それなら良か
た

あにたどニ 父モトニ しゃあい てきゆつ

そして、スバルは家を

そして、スバルは家を

「お前本当に変わったよな・・・」

「ロックのおかげだよ」

「・・・といつよつ、早く行かな」とやばくないか?また、怒られるぞつ!」

「大変だ〜〜〜!!-急がないとまた、委員長に怒られちゃうよ!」

そして、スバルはダッシュでコダメ小学校に向かった・・・

始業式

「ふう～・・・やつと着いた・・・ギリギリセーフだね・・・」「セーフなわけないでしょっ！！！初日から、何遅く来てんのよっ！！！」

「げっ！・・・『めん、委員長っ！』

「私は生徒会長なのよっ！初日から遅く来るなんて・・・」

ガミガミガミガミ・・・

「・・・まあ、今日のところは特別許してあげるわ！」「

ふう・・・大きなため息。

「早く行くわよっ！」

「はつ・・・はい！」

そして、スバルたちは、体育館に向かつた。

「あいかわらず、朝から元気のいい奴だつたな・・・」

「そうだね・・・」

（始業式）

「・・・であるからにして・・・私は・・・」

パンツ！

突然、体育館の照明が、暗くなつた。

「なんだつ！」

「うわっ！」

「こわいよ～」

「・・・オイ、スバル、ビジライザーかけてみるよ」

「えつ・・・あつ・・・うん」

ウォーロックに言われたとおり、スバルは、ビジライザーをかけた。

そして、上方を見上げると・・・

「あつ！ウイルスだつ！」

「スバル、電波変換して、あいつらをやつつけちまおうぜー。」

「えつ！ここで？」

「今は暗いから、誰もわからないはずだつ！急げつ！」

「うつ・・・うん」

スバルは電波変換し、ウイルスたちの方に向かつた。
「スバル、バトルのやり方はおぼえてるよな？」

「覚えてるよ！」

「じゃあ、いくぞつ！」

ロックマンとなつたスバルは、華麗にウイルスたちをテリートしていぐ。

「どじめだつ！バトルカード、ソード！――！」

ウイルスたちをテリートしたスバルは、故障していくところをおし、体育館に戻つた。

「どじいってたの？スバル君？も、もしかして、ロックマン様に変身してたわけじゃ・・・」

「ごめん、委員長、僕・・・」

「さすがはロックマン様ね・・・ってスバル君をほめてるわけじゃないからねつ！」

「わかつてゐよ・・・」

「さあ、これからよつ！」

「これからつて、何？」

スバルが首をかしげると、キザマロが、

「クラス替えですよ、スバル君」

「何だ、それ？おいしいのか？」

と、ゴン太。

「去年もあつたぢやないですか！ゴン太君、クラス替えとは、違う学年になつた時、クラスのメンバーを変える事ですよ！」

「まあ、私たちブライザーが、別々になる事はないけどね！」

「そうだな、委員長！」

「じゃあ、今年もよろしくね、キザマロ！」

「ハイツー！ちちら！そです、委員長つー全力でサポートをさせても

らいますっ！」

「今年は少しくらいやせなさいよっ！」「ゴン太！」

「おつ・・・おう」

「スバル君、今年もよろしくね！私に何かあつたら、ロックマン様になつて、すぐ助けるのよわかつた？」

「うつ・・・うん」

「あつ・・・そうだ、僕新しいハンター→Gにしたから、また、ブラザー結び直してくれない？」

「わかつたわ」

「おうつ！」

「ハイ、喜んでっ！」

そして、スバルは3人とブラザーを結び直した。

始業式（後書き）

お決まりのバトル入れたみたんですけど、どうでしたか？みなさん、気軽にコメントとかしてくださいね。

クラス替え

「じゃあ、先行ってるから、早く来なさいよ」
そう言つて、3人は行つてしまつた。

すると、ウォーロックが、

「あのつむせじオシナと、やつと離れられるかもしれないんだよな
？」

と言い、笑つてゐる。

スバルは、苦笑いを浮かべ、6年生の部屋がある3階に行つた。
3階では、クラス発表が、もう始まろうとしていた。
「これから、クラスの名簿を全員のハンターヴGに送ります」
しばらくして・・・

「あつ！メールが来た！」

「どれどれ・・・僕は、6-Aだな」

「他のみんなはどうだらう？」

スバルは、他のみんなを探した。

「・・・えつ・・・嘘つ！？」

スバルは何度も目を凝らして見た。
しかし、変わる訳もなく、ただ悲しい現実がそこには書いてあつた。

「キツ・・・キザマロが・・・」

そう、キザマロだけB組だつたのだ。

そして、委員長たちがやつてきた。

「みつ・・・グスツ・・・みなさん・・・」

「キザマロッ！・・・だ、だらしないわね！・・・わつ、私たちは、
ブラザーでしょっ！そんなことで、泣いててどうすんのよっ！」

確かに、委員長の言つとおりだ。

「そだぞっ！キザマロー何かあつたらすぐ俺に言え！助けてやる
からなっ！」

「ううつ・・委員長・・ゴン太君・・・」

「僕も手助けできることがあつたら言つてね」

「キザマ口はだいぶ落ち着いてきたようだ。」

「ありがとうございます、みなさん・・ぼつ、僕がんばります！」

「そろそろ教室に行かないと・・・じゃあ、放課後会いましょう、キザマ口」

そう言つて、僕ら3人は教室に入った。

スバルたちの担任は育田先生で、副担任は、メテオGの事件以来コダマ小学校で働いている、クインティア先生だ。ちなみに、弟のジャックもA組だ。

しばらくたつて・・・

「今日はこれで解散！」

育田先生がそう言つと、みんな帰り始めた。スバルたちはキザマ口と一緒に帰るためB組に行つた。

「おまたせしました～」

キザマ口は嬉しそうにこいつちに来た。

「実はですね、友達ができました～！」

「どうやら、二口二口していたのはそいつことだつたらしい。」

「良かつたじゃない～で、どんな子？」

「とても優しくて、僕が一人でいるときも声をかけてくれました～！」

「良かつたなつ！キザマ口」

「はつ、はい！これで学校も楽しくなります～！」

それから4人は家に帰つた。

夕方になつて・・・

「今日は疲れたな～」

と言つて、両親にクラスのことを伝え終わったスバルは、ベットに倒れ込むと、すぐ寝てしまった。

クラス替え（後書き）

・・・といつわけで、キザマロと離ればなれになってしましました。
少し間が空いてしまいましたが、読んでいただければ、光栄です。

いきなりの事件

（始業式から一週間後の夜）

「俺の命令に従わない星は消すと言つただろーーー！」

そう言つて1つの惑星が消えた・・・

すると、突然マー・キュリーと思われる影が現れた。

「…クシ…様、ロックマンをご存知ですか？」

「知つてある・・・それがどうした？」

「あとあと、やっかいになるので、排除しておいてもよろしくですか

？」

「いいだらう」

そして、マー・キュリーと思われる影は消えていった・・・

（朝）

スバルは学校の支度をしてニコースを見ていた。

「大変なニコースです！只今、昨日天王星が消えたとWAXAが発表しました！……天王星は……」

ブチッ！

スバルは電源を消した。

「お父さん、本当！？」

スバルはとても驚いた様子だ。

「残念ながら・・・」

最後まで聞かずスバルは学校に行つてしまつた。
学校でもその話でもちきりだつた。

（休み時間）

「スバル君はどう思つ？」

委員長に聞かれ考えるスバル。

「こんな事はあり得ないと思うよ…でも、僕は地球がこうなつちゃつたら…なんて考えちゃつた」

「それは心配し過ぎだろ、スバル」

「そ、そうだよね」

スバルは笑つて「」まかした。

「今日の昼は牛丼だ～！～！」

「食べ過ぎないようにしなさいよ～！」

「おっ、おう……」

すると、突然、水が教室に入ってきた。

「うわあ！水がっ！」

「いきなりなんだつ！みつ、水！？」

「きやあ～！」

どんどん水が増えてくる。

しばらくすると、水の増えが止まり、放送が入つた。それは、聞いた事のない声だった。

「ロックマンに次ぐ……」ここにいる全員の命を助けたければ、水道コントロールの電腦に来い…………30分待つてやる

「おい、どうすんだ？」

「行くよ～。どんなやつか知らないけど、学校をめちゃくちゃにするなんて許せない！」

そして、スバルは電波変換して、水道コントロールの電腦に行つた。

電腦世界では、水が流れていて奥に行くのは大変だった。
何度も流れ奥につくと、

「ここに、強力な電波を感じる……」

スバルも感じていたが、メテオGのクリムゾンドラゴン戦の時くらいの電波を感じた。

「ようこそ、ロックマン……私は、マーキュリー」

余裕の表情でマーキュリーは笑つている。

「何者だつ～！何のためにそんな事するんだ～！」

すると、

「私は惑星の守護者の一人……目的はお前を『テリート』し、地球をとある星とおなじ運命をたどらせる事だ」

と云ふ、今度は、残酷な眼つきで睨んできた。

二番目の事件（後書き）

ひつと中途半端に終りました。次回まつこマーキュリー
対決です。

ちなみに、マーキュリーは、水星の半径なので、水属性です。

水星の力

「ある星つてまさか・・・」

「そう、天王星だ」

あいかわらず、マー・キュリーは冷たい目つきで睨みつけている。

「さあ、無駄話は終わりだつ！行くぞつ！」

ついにバトルが始まった。

「いくぞつ！バトルカード、プラズマガン！」

しかし、水のバリアでスバルの攻撃は、かき消されてしまう。

「無駄だつ！このバリアがある限り、俺に指一本触れる事はできねえ！今度は、俺の番だつ！くらえつ！アクアボム！」

すると、水色の球体が3個マー・キュリーの手から発射された。そしてすぐに、3つの球体は大爆発を起こした。

「ぐあつ！なんて威力だ！でも今がチャンスだつ！くらえつ！エレキスラッシュ！」

攻撃した瞬間の隙をつき、スバルは攻撃した。

しかし、カウンターを取られ、逆に隙ができてしまった。

「へりえつー！」

すると、いきなり、足もとから触手のような物がでてきたかと思うと、体に巻き付き、スバルは身動きが取れなくなってしまった。

「ぐああつーー！」

巻き付いた触手が、スバルの体を締め付ける。

「どうだ、己の無力をあじわつたか？」

そう言いながら、次の技の用意をし、触手が消えてすぐに水色のレーザーを浴びせようとしていた。

「くつー！インビジブル！」

「無駄だつー！」

相手の言つとおり、スバルはもろにダメージを受けてしまう。

「くつー！インビジブルが効かないなんて……！」

スバルは、次々にダメージを与えられ、ぼろぼろになってしまった。

「リ、リカバリー！」

回復したスバルはあきらめず、攻撃をしかける。

「いけつー！ウインティアタックー！」

この技でバリアをはがし、すかさず、スタンナツクルでスバルはダメージを与えた。

「いけつ！ボルテックアイ！」

スバルは、狙いを定め、ボルテックアイを命中させた。

「くつ！小癪な！仕方ない、この技を使うしかない……アクアボルテックス！」

すると、大きな渦潮ができ、飲み込まれたスバルに、追撃を食らわそうとしたその時、青い稻妻が、マーキュリーに落ちていった。

水星の力（後書き）

多分次回でマー・キュリー戦終わりです。

青い稻妻を使った正体は、しばらくお預けです。

ちなみに、レーザーは対インビジブルです。

今回は、感想を参考に行を空けてみました。読みやすくなつてると
いいです。

「ぐあっつーな、何だ？」

スバルは渦潮から抜け出して、隙だらけのマークュリーに追撃をくらわそくと準備する。

「くらえつーソードファイター！」

ソードファイターと呼ばれる技でマークュリーを連続で斬りつけた。

「くつ……調子に乗るなっ！」

マークュリーは青い剣で怒濤の勢いで攻めてくる。しかし、スバルにはその攻撃が読めていた。なぜなら、ブライと今まで戦つてきて、この程度の攻撃ならよけるようになつてきていたのだ。逆に、この程度の攻撃をかわさなければ、とくに、デリートされていたはずだ。

「この程度の攻撃なら、簡単によけられる。」
「さう……しかし、ここまでだ……！」

だいぶマークュリーは疲れていた。

「せみな……しかし、ここまでだ……！」

青い光が消え、傷がなくなつた状態で復活した。

「そんなん……！」

形勢逆転したマークュリーは疲れているスバルに容赦なく攻撃を浴びせる。

「俺は、好きなときにはいつでも回復できるのや……それつーへりえつ！」

「チツ……厄介なヤロウだつ……」

「ロツク、どうすれば……クツ！」

「スバル……方法は一つだけだ……それは、回復が追いつかないくらいに攻撃するつてことだ」

しかし、今のスバルはそんなに攻撃できる余裕はなかつた。

「君の最期にいい物を見せてあげよう」

すると、青い魔方陣が現れ、そこから1匹の竜が現れた。

「これは電波獣といつて特別な者だけがもつてるペツトさ……君の最期にちょうどいいだろ？……いけつ！マークュリードラゲリオン！お前の力を見せてやれ！」

ペシトは電波獣（後書き）

すいません。今回で終わらせました。次回で終わらせるつもりです。

特別編の募集もしますので、よろしくお願いします。

決着！（前書き）

ついに決着です。

決着！

マークュリー・ド・ラ・ゲリオンは青いレーザービームのような光線で攻撃を仕掛けってきた。スバルは間一髪よけるが、マークュリーの攻撃にあたってしまう。

「なんて不利なんだ……」そのままじゃ勝ち田がない……どうすれば……あつ！ そうだ！」

何かを思いついたらしく、マークュリー・ド・ラ・ゲリオンの方に向かっていく。

「やつちまあえ！ マークュリー・ド・ラ・ゲリオン！」

しかし、スバルは向きを変え攻撃をかわそうといきなり必死に逃げ出した。

「チッ……仕方ない、アクアジョットだー・ド・ラ・ゲリオン！」

すると、速さが増しすゞい勢いでスバルたちに迫つていく。

「くつー！ まだだ！ ジェットアタック！」

本来は攻撃技だが、スバルはこの技を加速するために使つた。

「フンッ！ 甘いっ！」

すると、逃げた先にマークュリーが立ちはだかる。

「はさみつかか……いくそつ！スバル！」

「うんっ！熱斗君からもらったカードの力みせてやるっ！」

光熱斗……クロックマン事件の時クロックマンが逃げた時代にいた、ロックマンをオペレートする小学生だ。彼からもらったチップと呼ばれる（今で言うカード）物をスバルは天地さんにカード化してもらったのだ。

「今だっ！エスケープ！」

いきなりスバルは上に飛んだ。しかし、上に飛んだスバルについていけず、マー・キュリーの電波獣は、そのままマー・キュリーに突っ込んでしまう。逃げるとまではいかないが、引きつけてかわすのにはこのエスケープは最適だつたらしい。

「よしひー！」

勝ち誇るスバル。しかし、けむりの中に、青い色が見えた。

「フツー！残念だつたな、電波獣は今私の手の上にいる……くらべつ！
究極奥義！アクアクライシス！」

「そ、そんなつ！」

手の上に乗つた大きなボール状のものがスバルめがけて飛んでいく。しかし、宙に浮いているスバルにはよける事ができない。

「ぐあつつつー！」

凄まじい衝撃波とともにスバルは氣を失った。

「サテラポリス本部 3階 病棟」

「ついで、この病棟から出られる訳だな、アシッド……つてもういいな
いのか……」

空のハンター→Gを見つめ、ひとつぶやく男は今日退院するよ
うだ。

「おめでとう、シドウちゃん……」

眼鏡をかけたおばあさんが声をかけた「の黒はシドウ」と「ハーリー」といって

「ありがとうございます、マイリー博士」

「」の眼鏡をかけたおばあさんはマイリー博士といつて博士のよいだ。

「残念だったわね……アシッドちゃんの」と……」

「……はい……」

そう言つて2人は病室を出ていった。

決着！（後書き）

マーキュリー戦終わりました。
ついに、シドウが出てくる訳ですが、アシシドはめぞんちやん、
次回はスバルがどうなったかです。

地球の守護者、アース！

（太陽系中心部）

「マー・キュリーは回復能力を失い、当分戦う事はできないくらいにやられている…次はヴィーナス、お前の出番だ」

ギャラクシーは女性の電波体に声をかけた。

「わかりましたわ、じゃあ行ってきます」

そう言つて、ヴィーナスは地球へと向かつていった。

「クッ…！アースめ…！」

悔しげるマー・キュリー。

「まあ、そう怒るな、傷が痛むぞ」

ギャラクシーになだめられながら、マー・キュリーは3日前の出来事を思い出していた。

（3日前 ノダマ小学校）

「ロックマンよ、ちりばだつ！」

氣を失つてじるロックマンとどじめをやめとした時、

「グラビティウーブ！」

突然、重力波がマークьюリーの背中を襲つた。

「クッ……アースか……」

アースと呼ばれる電波体は体中が岩でおおわれ、防護がとても固そうだった。

「地球を3度も救つた者を、見殺しにするわけにはいかないからな……いくぞつーグラビティホール！」

突然マークьюリーの足下に小さな、ブラックホールのような物が現れた。

「動けないと……！」

この技は相手の動きを封じる事ができるようだった。

「とじめだつ！究極奥義！アースインパクト！』

動けないマークьюリーは大ダメージを負い、倒れた。回復は追いつかなかつたようだ。そして、アースはロックマンの応急手当をし、帰つていつた。マークьюリーはその後、ヴィーナスに助けられて帰つた。

～サテラポリス本部
3階
病棟～

スバルは3日間病棟で寝ていた。

「うわっ！遅刻しちゃう！」

しかし、いきなり飛び上がり、部屋を見て驚いてしまう。

「真っ白な部屋だ……」「？」ウオード・ケン

「これはサンテラボリスの病室だ」

病室と闇を驚くスバル

「僕、気を失つたんだ…」

「スバル、失礼するわよ」

ドアが開いてあかねと大吾が入ってきた。

地球の守護者、アース！（後書き）

少し短かったです。

次回ついにあの人と再開します。

「無事で良かつた…」

あかねはかなり心配していたようだ。

「「あん…母さん…父さん、僕はどうやって助けられたの?」

スバルはそのことが気になっていたようだった。

「サテラポリスの人たちが倒れてるお前を助けてくれたんだ」

（…とどめはされなかつたんだ…）

すると、外から声がした。

「ちょっと、失礼していいかしら」

「ヨイリー博士…お久しぶりです」

「久しぶりスバルちゃん、ウォーロックちゃん」

そしてヨイリー博士は、ドアの外を指差しながら言った。

「みんないらっしゃい」

すると、委員長、ゴン太、キザマロ、ミンラが入ってきた。

「スバル君、大丈夫?」

「大丈夫か？スバル？」

「スバル君……無事で良かったです」

「久しぶり～大丈夫？」

と、みんなスバルの心配をしてくれているようだった。とくにソラは芸能界で働き、忙しいのにお見舞いに来てくれていた。

みんなで久しぶりに色々楽しくしゃべっているヒドアの外で…

サクサクサクサク……

懐かしい音が聞こえて来た。

「久しぶりだな～スバル」

「暁さん！大丈夫だつたんですか？僕、もうてつきりだめなのかと

…」

そしてサテラポリスの暁シドウがやつて來た。彼はメテオGの事件でみんなを守るために死んでしまったと思われていたが、ブライとクインティアとジャックのおかげで委員長と同じようにして帰つて來たがしばらく入院していた。

「俺はこのとおり大丈夫だ、お前も大丈夫か？」

「大丈夫です… そう言えばアシッドはどうですか？」

「…………あこつせむわ……こなー……」

衝撃の言葉にスバルは返す言葉もなかつた。

「あいつは……」

「暁ちゃん……なんか……すこません」

「お前が謝る事じゃない……あの口俺は、お前らを守るのこ必死だつた……」

再開（後書き）

次回はシドウが復活するまでの話です。

アシッドはもうこない

「去年 ディーラーアジトへ

スバルはグレイブ・ジョーカーとの戦いに勝った。しかし、ジョーカーは周りを巻き込み自爆しようとする。するとアシッド・エースとなつたシドウがジョーカーの爆発を止めようとした。

「暁さん！」

スバルの声がする…

「シドウ、これは私の問題です、いますぐ電波変換をしてください…命に関わります」

と、アシッドは言つが、シドウは解くつもつはなかつた。

「それは無理だ、アシッド…お前だけで押さえられる爆発じゃないからな」

「ダメですシドウ……」

もう遅かつた。ノイズを大量に含んだ爆発により一瞬でアシッド・エースは消え去つた。

「暁さん……！」

その後、スバルがメテオGを破壊してから、ジャックやクインティアはブライの力を借りシドウのかけらを集めサテラポリスに渡し

た。しかし、アシッドについての事は他のサテラポリスが探しても見つかる事はなかつた。ヨイリー博士によるとノイズを大量に含んだ大爆発だつたため、アシッドの電波が崩壊してしまつたらしい。それからシドウは入院し昨日までリハビリを続けていた。

（病棟）

「・・・と言う訳だ...俺はみんなを守るために必死であいつの」とを考えていなかつた...なのに俺だけ生き返つて...ちくしょう!」

シドウの目に涙が浮かぶ。

「あいつ、いい奴だつたのにな...」

ウォーロックも悲しそうだ。

「自分を責めないでね、シドウちゃん...私たちだけで対処できなかつたことにも問題があつたんだから...」

だいぶ落ち着いて来ていたみたいだつた。

その後みんなでスバルの家に行き、スバルとシドウの退院パーティーを行つた。ミソラは仕事があるため早く帰つたが、みんなは遅くまで楽しくしゃべつていた。10時くらいになり、みんなは帰つ

ていった。

「父さん、母さん、今日はありがとうございました、明日から学校だし僕もう寝るね、おやすみ」

そう言つてスバルはベットに入った。

アシッドがもういない……

僕はマーキュリーに負けた……

色々なことを考えてしまい、スバルはなかなか寝付けなかつた。

アシッドはもうこない（後書き）

次回は久しぶりの学校です。
ミソラがあんまり目立つてない気が…
まあ、これから目立たせてていきます。

孤独なキザマロ

（スバルの部屋）

「おい、起きろスバル！遅刻するぞー！」

時計は学校が始まる10分前を指していた。

「やつ、やばい…」

スバルは超高速で着替えると、パンをくわえたまま出て行つた。

「いってきまーす

スバルは全速力で走つていく自分を「」と見てる一つの影に気が付かなかつた。

「ハア…ギリギリ…ハア…セーフだ…ハア…ハア…」

スバルはかなりバテていた。そして、

「セーフじゃないでしょっ！」

いつもどおりの怒りの声と共に、久しぶりの授業が始まつた。

（6-B組）

「海碧くん遅かつたですね～」

「「めん」「めん、寝坊しちゃってやー」

今教室に入つて来てキザマロと話していた人は荒海 海碧という名で、今年から入つて来た転校生で、頭もよく、いわゆるイケメンで、女子からの人気も高い。

「遅かつたな！海碧ー！」

今のは大木 大和といい、ゴン太よりひとまわりでかく、身長は学年でぶっちぎりのトップだ。この2人が新たなキザマロの友達でブランザーも組んでいる。

「今日は小テストの返却だぞー」

担任の言葉にみんな元気がなくなる。

そして、しばらくなつたち……

「それじゃあ、テスト返すぞー今回是最小院と、大木、それから荒海が満点だ」

「やりましたねー！2人ともー！」

しかし、海碧は考え方をしていて聞いていないうつだった。大木は聞いていたようだ。

「ありがとなつー！チビマロー！」

いつもよつよつこ口調で大木は言った。

（おかしい…いつもは優しい大木君が僕をチビマロって呼ぶなんて…）

キザマロはチビマロと呼ばれるのがかなり嫌らしい。

「お前のおかげで、これからもいい点が取れそうだ…これからも利用させてもらひば…チ・ビ・マ・ロ」

大木の嫌な言い方にキザマロは顔を真っ赤にして怒った。

「大木君、なぜそんな名前で呼ぶんですか？本当にやめてください…見損ないました！大木君！…」

だが、大木は笑いながら、

「へッ…チビにチビって言つて何が悪い！だいたい俺はお前と仲良くするつもりはねえし、お前が頭がいいからそれを利用させたもらつただけだ！この際もうマロ辞典のデータはもらつたことだし、お前とのブランザーなんて切つてやる！」

キザマロはどうやら大木に利用されていったみたいだ。

「絶交です…大木君………」

心配になつたキザマロは海鷗に向かつて言つた。

「…まあ、まあか海鷗君もマロ辞典田当てですか！…」

すると海鷗はあわてて、

「ぼ、僕は違うよー。キザマロー！ 信じてみー。」

キザマロは少し安心して、

「あ、ありがとうございます海鷗君……疑つてすいませざ

そして、授業が始まった訳だが、大木はずつとキザマロの事をいじめ続けた。

（明日も学校か……行きたくないな……）

その夜、キザマロは大木にいじめられた夢を見た。

→「コダマタウン 公園」

だいぶ遅くなり人通りもなくなつてきたコダマタウンの公園で1つの電波体が笑っている。

「フツ……いい奴を見つけたぜ……」

そう言って謎の電波体は風と共に暗闇の中に姿を消した。

孤独なキザマロ（後書き）

オリキヤラ2人も出しちゃいました。
次回はかわいそうなキザマロ元気なひらひら

（次の日）

「今日は珍しく早いな、スバル」

スバルが久しぶりに早く学校に向かっているので不思議に思った
ウォーロックが聞いた。

「今日はキザマロの誕生日だから、早く行って委員長たちと打ち合
わせしないといけないんだ」

そう、今日はキザマロの誕生日だ。ドッキリパーティーをするた
めの打ち合わせを朝からしようと委員長が囁つのだ。

（5・A組）

「おまたせ～」

教室には見慣れた3人以外に1人の男の子がいた。

「はじめましてスバル君、荒海 海碧です」

荒海 碧海と名乗る男の子がかっこいいといつのはスバルが見て
も分かった。

（この子、かなりかっこいいな……）

「彼は、B組でキザマロと仲がいいのよ、それで今回のパーティー

に参加してもいいかと思つてゐる」

そしてスバルが、

「はじめまして海鷗君、よろしくね」

と挨拶すると、委員長が今日のパーティーの話を始め、みんなで相談をした。

じばうくして…

「じゃあ、早くにキザマロの家に行つて用意をするから学校が終わつたら、みんなでキザマロの家に集合つてことでいいわね？もし、鍵が開いてなかつたらスバル君よろしくね？」

「…わかった」

こうしてスバルたちは計画を立て終わつた。すると、ミンラからメールが来た。

「…ミンラちゃんも誕生日パーティーくるんだ…キザマロ喜びそうだね」

「そうだな…お前もまたすぐ会えて嬉しいんだ？」

スバルの顔が赤くなつた。

「…いや、嬉しいけど…でも別に喜びの意味じゃなくて…えーと…」

「素直に嬉しそうと言えよな！」

～放課後～

学校が終わり急いでキザマロの家に行き、鍵を開けたスバルたちはニンリとも合流し、中に入つて用意を始めた。

その頃……

「はあ～今日も大木君にいじめられました…ってあれ？委員長たちも海碧君もいない…まさか委員長たちも僕の事を裏切つて、みんなで遊んでるわけ…」

委員長たちが待つてくれなかつたのは初めてだつたのでキザマロは不安になつてしまつた。

「そんな…どうして…僕はなんでいじめられるのでしょうか？僕は何にも悪い事していないのに……」

すると、風が強く吹きいきなりキザマロの前に鳥の形をした電波体が現れた。

「悩んでこらみたいだな、俺が助けてやるつか？」

キザマロはヤケになつてこらめるよつで、

「僕の事なんかほつとこらへだせ……ビリセ誰も分かつてくれないんですから……」

と言い、家に帰ろうとするが、

「分かつていいが、お前は孤独なんだろ？ 裏切られひとりぼっちになつちまつたんだろ？ それなら俺の力を使って、その仲間はずれにして来た奴らに仕返しじゃれよ」

「だめです！ そんな怪しいものに頼つては……」

とキザマロのウイザードのペーティアが言つた。 じょろくキザマロは考えた。

（みんなに仕返しがしたい……でも……）

そしてじょろくた、

「私はあなたを信じます！ お願いします！ 僕に力をください……」

と言い、電波変換した。鳥の姿になつたキザマロは高こ鳴き声をあげ、

「皆さん、思い知つてください！ 僕の力と頭脳を……」

といい、自分の家の前から姿を消した。

勘違い（後書き）

次回はキザマロが暴れだします。
少し今回は長くしました。

わし座と琴座

（キザマロの家）

「遅いわねー！キザマロ…せつかく私が用意しているのこ…」

誰が見ても明らかであるが、委員長はいらだつている。

そしてその時、外で悲鳴が聞こえた。

「誰か助けてー！飛ばされぬー…」

委員長たちは外に出て助けを呼んでいる人を助けようとした。しかし突然の突風に助けるどころではなくなってしまった。

「ど、どうすれば…」

するとウォーロックが、

「あそこには変な奴がいるぞー！」

ジックグウェーブの上に鳥の形をしたキグナスのような電波体がいた。

「とりあえず、電波変換するよー！」

スバルが電波変換すると、ゴン太とミソラも電波変換をした。突風は電波体には影響が無いようだつた。

「ゴン太は委員長たちと他の人たちを助けてあげて！」

とりあえず、委員長たちはヨン太に任せ、ミソラと一緒にビッグウェーブに急いで行つた。

「逃がさないぞ！ そこの電波体！」

と、スバルが声をかけるとその電波体はよく聞こいでいるあの声でしゃべった。

「スバル君とミソラちゃんですか…僕を倒そうといつなら受け立
ちましょー!」

すると、キザマロに取り憑いている電波体が言った。

「……こつはお前に仲間はずれにされたから、仕返したいんだと
……つてあれ？お前ハープか？」

「も、もしかして……ア……アクリラじやない？」

アクリラという電波体とハープは何らかの関係があるらしい。

「口ッケ、2人は知り合いなの?」

少しためらいがちにウォーロックが言った。

「こいつらは… 地球でいう恋仲だつたんだ」

スバルはハープは戦わないと言うに違いないと思った。

「そ、 そ う な ん だ …」

そして予想通りのことをハープが言った。

「私、 戦 え な い わ … ゴ め ん ウ オ ー ロ ッ ク …」

仕方なくスバルは1人で戦うことになった。

（太陽系中心部）

「ヴィーナスよ… 順調か？」

ギャラクシーは聞いた。

「FM星人のアクイラという電波体にとりあえず任せています」

アクイラはヴィーナスの部下だったようだ。

「分かっ た … 任せたぞ、 ヴィーナス …」

「分かりました、 では」

そして、ヴィーナスは地球に戻つて行つた。

わし座と琴座（後書き）

次回バトルが始まります。

向かい風

「来るぞ！スバル！」

するとアクイラは素早い動きで自分の周りを回り始めた。

「チツ……これじゃあ狙いを定められねえ！」

「それなら……グランドウェーブだーくらえつー…

しかし、攻撃が当たってもアクイラは気にせず回り続けている。そしてスバルは周囲の異変に気がついた。

「こ、この技、竜巻を起こしているみたいだよー早く出ないと……くつ！」

気付いたときは遅かった。もうスバルは完成した竜巻の中に飲み込まれていた。そして、スバルたちは上に飛ばされた。

「いきますよスバル君！」

キザマロは風の剣を作り、上に飛ばされ無抵抗のスバルの体を斬りつけた。スバルの体に激痛がはしつた。

「くつ！今度は僕の番だ！ソードファイター！」

しかし、すべての攻撃を紙一重で避けられてしまつ。

「遅すぎますよスバル君！」

と言つと、一瞬にしてスバルの目の前に現れ、連續攻撃を浴びせてきた。

「どうすればいいんだ…」

自分の攻撃は全てかわされ、相手の攻撃は全てまとめて受けてしまつている。この状況がずっと続けば体力がなくなり勝ち目はない。

「仕方ない…おい、スバル」のカードを使え…」

するとスバルの前に見た事のないカードが現れた。

「カマイタチ？ ロックこのカードビツやつて手に入れたの？」

「これはサテラポリスが新しく作つたバトルカードで、一枚大吾からもらつたんだ…これなら見切られる事は無いはずだ…いくぞつ！
スバル！」

スバルはこの見た事のない新しいカードを使った。

「くらえつ！ カマイタチ！ …！」

すると、風の刃がアクイラの体に命中した。そしてのけぞつているところに追撃をくわえた。

「ソードファイター！」

アクイラは追撃にも耐えたが、今までかなりのダメージを負つているようだった。

「やりますね……スバル君……でも、これからが勝負ですよ……」

スバルはこれ以上キザマロを傷つけたくなかつた。

「キザマローもつもみよつね……こんなことしても意味ないよ……キザマロ、君は僕たちのブリザーなんだよ……」

しかし、キザマロは戦いをやめる気はないらしく、

「そのブリザーを仲間はずれにして、僕にこんな事をさせつづけるのあなたたちです……」

と言い攻撃をしてきた。

「へつ……キザマロ聞いてくれ……それは勘違いだ……」

するとキザマロの攻撃の手がやんだ。

向かい風（後書き）

次回くらいで対アクイラ戦を終わらせる予定です。

ヴィーナス現る！

「僕たちはキザマロを驚かそうとして、しつそり誕生日パーティーの用意をしていたんだ…別にキザマロを仲間はずれにしていたわけじゃないんだ！信じてよ！キザマロ！」

「…ぼ、僕は勘違いをしてこんなことを…す、すいません、スバル君…」

キザマロはとても反省しているようだった。しかし、

「お前が戦う気がねえなら、勝手に暴れさせてもいいぜ…くらえつ！」

アクイラは無防備な状態になつてているスバルに攻撃した。

「うわあっ…もう体力が限界だ…」

アクイラはスバルにとどめをささうとしたが突然動きが止まつてしまつた。

「ス、スバル君今のうちに…僕は大丈夫ですから攻撃してください…うわあっ！」

スバルはキザマロの言葉を信じ攻撃をした。

「今助けるからね！キザマロ！ソードファイター！！！」

「ぐわあああ！！！」

スバルの攻撃によりアクイラの電波変換が解けた。キザマロは気を失っている。

「チッ…まだだつ…次は絶対倒してやるからな…覚えておけ！」

と言つて、逃げようとしたとき、

「次はないと言つたはずですわ、ヴィーナスサンダー…！」

アクイラめがけ雷が落ちた。

「…ぐつ…チッ…もう終わりか…逃げる…2人とも…すまなかつた…ぐつ…お、俺は奴に脅され…ぐわああ…！」

2発目が落ちた。

「早く逃げろ…！」

「逃がさないわ…3人まとめてテリートしてやるわ…ヴィーナスボルト…！」

2人はキザマロをかかえ攻撃をかわしながら逃げ出した。後ろではアクイラがヴィーナスに向かつて飛んで行きヴィーナスを巻き込み自爆しようとしていた。

「アクイラ…！…ダメツ…！」

ハープが叫んだ。

「あばよ！ハープ！！」

空中で大爆発が起きた。

～キザマロの家～

「み、みなさんありがとうございます…迷惑をかけてすいません…」

キザマロの家では誕生日パーティーが行われていた。ミソラの曲やハッピーバースデートゥーコーの曲をみんなで歌った。キザマロが生きてきた中で一番楽しく感動した誕生日パーティーだった。そしてこれから誕生日パーティーの中でも一番思い出になるであろう…

外では…

「アクイラ……」

夜空に浮かぶ星を見つめながら涙を流す琴の形をした電波体が一
体泣いていた……

（太陽系中心部）

「ケガはどうだ？ ヴィーナスよ……」

ヴィーナスは傷だらけになっていた。

「今晚中にネプチューンが治してくれます…… またすぐ地球に行きますわ……」

「わかった…… あいつを甘く見すぎたはなりぬぞ…… ヴィーナス」

「わかりましたわ」

ヴィーナスは海王星に向かって行つた。

ヴィーナス現る！（後書き）

アクイラ戦終わりました。
今日はもう1話投稿します。

水星のカケラ

（キザマロの事件の一週間後）

「おい、起きろスバル！ 遅刻するぞ！」

いつも通り時間は遅刻寸前だった。しかし、スバルはゆっくり眠そうに起きた。

「…ったく…今日は創立記念日で学校無いから遅くまで寝よつと思つたのに…」

今日は「ダマ小学校の創立記念日で全学年が休みだつた。それに起こされてしまい少しいらだつていいようだ。着替えを終えリビングに行こうとした時、ハンターV Gにメールがきた。

「暁さんからだ…なんだろう？」

『スバルへ

この前の惑星の守護者のことで分かつた事があつたから、これからWAXAに来てくれないか？

サテラポリス 暁 シドウ

』

と書いてあつた。

返信をし、スバルはリビングに行つた。

「おはよう、スバル、今日は早起きだわね～ どうかしたの？」

「暁さんに呼ばれたんだ」

朝ご飯食べ終えたスバルは家を出てWAXAに向かつた。

「しそい室」

しそい室ではヨイリー博士たちがいた。

「スバル、この前の事で分かつたことを説明するな…この前スバルが入院してた時、ウォーロックの体も調べさせてもらつた…そしたらウォーロックの体からいつもとは違う周波数が出ていた…それでその体のデータを調べたところ、この星の物ではない強力な力が封じ込められた物体が見つかった…

おそらく、これはお前が戦つたマークリーのものだらう…俺たちはそれを水星のカケラと名付けた」

「つてことはその水星のカケラの力が引き出されれば僕はもっと強くなれるつてことですよね？」

マークリーに勝てなかつたスバルはヴィーナスに勝てるか不安だつた。この力があれば勝てるかもしれないと思つた。

「ああ、でもその方法は今のところないし、あつたとしてもお前がその力に耐えられるかは分からぬ」

スバルは少しがつかりした。

「ありがとうございます、暁さん」

帰ろうとするスバルに天地さんが声をかけた。

「用があるって大吾さんが呼んでたよ、スバル君、ちなみに7階の研究室が大吾さんの研究室だよ」

そしてスバルは7階に行つた。

（7階 大吾の研究室）

スバルは研究室に入り大吾に声をかけた。

「父さん、用つて何？」

大吾は何かを作つていたが、作るのをやめスバルに言つた。

「（）の前言つてた、ヴィーナスがいつ来てもいいように、新しいカードを作つたからデータを送ろうと思つて呼んだんだ」

スバルは大吾にハンターV-Gを渡し、データを送つてもらつた。

「このカードはクリムゾンキヤノンと言つてクリムゾンドラゴンに吸収されたときに体の中にたまつたノイズを圧縮したものを相手に打ち込むカードだよ……他の物に影響を及ぼさないようにするのが大変だったんだ……」

「ありがとう、父さん」

そしてスバルは家に帰り遅刻しないようにと早めに寝た。

約束

「ドラマ小学校」

金曜日になりHRも終えたスバルは学校を出て家に帰りました。すると後ろから委員長が声をかけた。

「スバル君、明日暇でしょ？ ゴン太とキザマロも呼んでるから明日うちに来なさいー いいわね？」

委員長の言う通りスバルは暇だった。

「わかった、じゃあまた明日ー」

そう言ってスバルは家に帰つていった。家の前についた時、後ろから突然目を手で隠されてしまった。

「だ〜れだ？」

その声はあの[人気アイドル響ミソラ](#)の声だとすぐ分かつた。

「ミソラちゃん？」

「正解〜」

と言つと、手を外した。後ろにはミソラが一瞬一瞬しながら立っていた。

「久しぶりに、会いに来たの … スバル君、明日一緒にベイサイド

シティで買い物しない?久しづりに休みが取れて、次いつ会えるか分からぬの…だから、お願い」

ミツラは上目遣いにしながらスバルを見た。

（久しづりつて、この前誕生日パーティーの時に会つたけど……でもどうしてみつめん、委員長と約束してゐし……でも当分会えないなら……）

スバルはとても迷つてゐた。しばらく考え、

「……分かつた……じゃあ何時に集合する?」

ミツラはとても嬉しかつた。

「じゃあ、9時にウエーブライナーの改札でいい?」

「いいよ」

「じゃあね~ 明日楽しみにしてるねスバル君」

そうして2人は家に帰つた。スバルは家に着くと、スバルは委員長に電話をした。

「じめん、委員長、明日は急用が入つちゃつて行けなくなつちやつた」

委員長は怒つてゐた。

「ふ~ん……せ、またミツラちやんとトーークにでも行くつもつ

でしょっ！せこぜこ2人で仲良くなれやこかやしてなれこーーー！」

ブチッ！

「何で、あんなに怒つてるんだろ？」

（やつぱり鈍感だな……）

ウオーロックがあきれているなか、スバルは委員長のカンの良さに少し感心してしまっていた。

（僕がミンカラちゃんと遊びに行く」とが、あんな簡単にばれてしまうなんて……）

～委員長の家～

「何よ！スバル君！私と約束した後にミンカラちゃんと家の前でデートの約束をするなんて……許せない！」

委員長はびひひひひスバルがミンカラと約束してくるのを見ていたようだった。

約束（後書き）

次から//リンクとのリポートです。

// ハラハラホーク (記者)

一週間ぶつの投稿です。

今後ともよろしくお願ひします。

「次の日

「……ちよつと早く来すぎたね……」

「はりきりすゞだわ、スバル」

スバルの顔が赤くなつた。

「そ、そんな事は無いよ」

時計は8時30分を示していた。ウォーロックと話していると、

「スバルく～ん！」

前方からミソラがやつて來た。

「早かつたね、ミソラちゃん」

すると、ミソラはここにこしながら、

「スバル君と早く会いたいと思つたから早く來たんだ～ じゃあ、行こつか！」

ミソラはスバルの手を引つ張り、ウーブライナーに乗つて、ベイサイドシティに行つた。

（電車の中）

「今日はあそこに行つて、ここに行つて……」

ミソラは今日の予定を立てていた。

(そんなにたくさん行くんだね……)

スバルは半分苦笑いでミソラの予定を聞いていた。

「そういえば、ハープは?」

ミソラのハンターVは空だった。

「Uの前のUことで、UにUに来る気分じゃないみたい……」

「そつか……」

ハープはアクイラが死んでしまったことにかなりのショックを覚えていたみたいだ。

「ベイサイドシティ」

ウエーブライナーを降りると、そこには都会の町並が広がっていた。

「今日は、新しくできたデパートがあるから、ここに行くよ

そして2人は大きなデパートに入つて行つた。

たくさん買い物をし、スバルが大量の荷物を持ったのはいつまで

もない。

「たくさん買つね……」

大量の荷物を持ったスバルが言った。

「ありがとう、スバル君」

ミソラは嬉しそうだった。スバルはミソラが喜んでいるのを見て、
(喜んでくれてる……良かつた)

昼になつたので、2人は近くのカフェで昼食を食べることにした。

「ここ」のサンドイッチおいしいね！」

と言しながら、ミソラはサンドイッチをすぐにたいらげてしまつた。

「……ス、スバル君……えつと、言いたいことがあるの」

ミソラの顔が赤くなつていた。

「言いたいことって何？」

さりに赤くなりリンクゴのよになつてしまつた。

「えつと、その……わ、私……」

中途半端なところで終わりました。
次回事件です。

「えっと、その……わ、私……スバル君の事が……す……！」

ミソラが言い終わらないうちに、突然電気が消え、暗くなつた。

「て、停電！？」

突然の停電で人々はパニックに陥つていた。

「スバル、強力な電波を感じるぜ！」

強力な電波のもとに行くため、スバルは電波変換した。

「ミソラちゃん、行つてくれるね」

そして、スバルは電気を管理している「コンピューター」に行つた。

電気だけが影響を受けているためウェーブロードに変化は無かつた。

「ここにいかにいるぞー！」

とても広い電腦で、コンピューターの中の管理システムを探すのには時間がかかりそうだった。

「お待たせ！」

後ろで声がしたので振り返ると、そこにはハープ・ノートとなつ

たミソラがいた。

「あれ？ ハープはいないんじゃなかつたの？」

「ハープに話したら、来てくれたの！」

すると、ハープが現れ、

「ポロロ」……こつまでも落ち込んでるわけにはいかないからね……

そうは言つてるがいつもより表情が暗かつた。

「じゃあ、手分けして探すよ」

と、スバルが言い、2人は手分けして探し始めた。

「スバル君に伝えられなかつた……はあ……」

ため息をつきながら歩いて行くと、管理システムと思われる装置があつた。

「見つけた……いくよー・ショックノート・フォルテッシモ！」

しかし逃げる直前に雷によつて攻撃ははじかれてしまつた。

「それはさせませんわ、ヴィーナスサンダー！」

ミソラはその場に倒れてしまった。

停電（後書き）

次回からヴィーナス戦です。

ヴィーナスの雷

その頃、スバルは

「ミツリちゃんが言いかけた事つて何だろ?」

すると、ウォーロックは言った。

スバル、お前つて本当に鈍感だな……」

そうやって語していると、いきなり、

一
也未見る。」

遠くで大きな叫び声が聞こえた。

「み、ソラちやん！」「

スバルはミソラのいる方まで全速力で走った。

そして管理システムの装置のところにたどり着いた。セレナはソラが倒れていた。

「…ごめんなさい」

声をかけたが、氣絶しているようすで返事がない。

「ついに来たわね、ロックマン

スバルは怒りをあらわにしていた。

「絶対、許さない！！！ ウッドスラッシュ！」

スバルは、ヴィーナスの体を斬りつけようとした。しかし、剣が体に当たった瞬間、電磁波がおき、スバルにダメージを与えた。

「物理攻撃が効かないなら……パウダーシュート！」

しかし、簡単に避けられてしまった

「そんな単純な攻撃しかできないのですの？ それなら、ヴィーナスサンダー！」

太い雷がスバルの頭に降り注いだ。

「なんて威力だ……次は僕の番だ！ クサムラステージ！」

すると地面が緑に染まった。

「いくぞっ！ ジャングルストーム！」

クサムラを吸い取り、ヴィーナスにダメージを与えた。

「少しほどきるみたいね……現れなさい！ 電波獣！」

鳥の格好をした、黄色い電波獣が現れた。

「チッ！ 厄介なのが出て来たぜ！」

「いくわよーサンダー・フレイム！」

ヴィーナスの技はかわしたが電波獣の攻撃は防げなかつた。

「くつ！でも、僕は負けるわけにはいかないんだ……くらえつ！
ゴガラシ！」

竜巻がヴィーナスに全てヒットした。

「この程度、たいしたことないですわ……面白い技を見せてあげる
わ！」

いきなり、ヴィーナスの体が光りだした。

ヴィーナスの雷（後書き）

次回もヴィーナス戦です。

アースの力！

やがて、ヴィーナスの光が一点に集まつた。

「くらいなさい！ヴィーナスレーザー！」

スバルは体の力が抜けて行くのを感じた。

「……力が抜けてく……でも、僕は負けるわけには行かないんだ！」

スバルは新しいカードを使つた。

「くらえつ！ 父さんが作ったカードだ！ クリムゾンキャノン！」

ノイズの塊がヴィーナスに命中した。

「なかなか、やるじゃないの……でも、これで終わりよ！究極奥義、
ヴィーナスボルテックス！」

スバルは金縛りにあつたように動けなくなつた。

「くつ……これで終わりか……」

ヴィーナスの手に電波獣が宿り、その手から太い電撃のレーザー
が発射された。

しかし、その攻撃はスバルには当たらなかつた。

「アースシールド！」

という声と共に1つの電波体が現れた。しかし、その電波体はヴィーナスの攻撃を防ぎきれず、大ダメージを負ってしまった。

「くつ……私は地球の守護者、アースだ……ロックマン、大丈夫か？」

スバルの金縛りが解けた。

「ありがとうございます、僕は大丈夫ですから、その女の子を助けてください、お願いします！」

アースは、

「分かつた……ロックマン、この前は大丈夫だつたか？」

「この前助けてくれたのは、あなただったんですね……ありがとうございます」

スバルはお礼を言った。

アースはだいぶダメージを負い、疲れているようだった。

「私を無視してもらつては困りますわね、アース……」

突然ヴィーナスの声がした。

「後は僕に任せてください！」

アースはうなずいた。

「分かつた……今からお前に力を『えよつ』……この力を使えば勝てるだろ『づ』」

すると、スバルは

「俺の力をお前に授けた……使いこなせるかはお前次第だ……」

そして、そつとミソツの治療を始めた。

「絶対負けない！ いくぞヴィーナス！」

「かかって来なさい！」

そして、バトルが再開された。

アースの力！（後書き）

次回くらいでヴィーナス戦終わりです。

新たな変身！（前書き）

そろそろ試験が近いのでいったん休止するかもしれません。

新たな変身！

「絶対負けない！ くらえ、カマイタチ！」

風の刃がヴィーナスを切り裂いた。

「うつ！……いきますわ！ ヴィーナスサンダー！」

今度はスバルに一筋の雷が落ちた。

「くつ……！」

すると、ウォーロックが、

「おい、スバル……力がコントロールできねえ……やばいぞ…！」

「うわああああ！…」

スバルは正気を失ってしまった。

「ハカイ……スペテコワス」

スバルは暴走をし、周りの物に無差別に攻撃をした。

「ど、どうしたんですの？」

ヴィーナスの事も気にせず暴走しているスバルに青い雷が落ちた。

「ぐつ！……ほ、僕はいつたい何を？」

スバルは正気に戻つたようだ。

「正気に戻つても私が勝つ事には変わりないですわ」

ヴィーナスは自信に満ちた表情で言った。

「ち、力が湧いてくる……」

突然、スバルの体が眩しい光を放つた。次の瞬間スバルはベルセルクの色を少し茶色っぽくしたような姿になっていた。

「な、何ですか？ その姿は？」

すると、ウォーロックが答えた。

「フュージョンアース、それが今の姿の名前だ……スバル、スーパーアーマーがついていて無属性の攻撃に移動不可がつく……そして、カウンター時にカードの威力が2倍になり、フォルダが専用の物になる……それがこいつの能力らしい」

「わかった……いくよ！ ヴィーナス、タイフーンダンス！」

無属性の攻撃で動けなくなつたところにさらに、追撃をくわえた。

「つ、強いじゃないですか……ヴィーナスボルト！」

「隙あり！」

ヴィーナスのカウンターを取り、2倍のダメージを与えた。

「これは……？」

スバルが聞いた。

「プラネットフォースピックパンPFBで言つて、カウンター時に来るカードの代わりで、超強力な一撃みたいだぜ！」

ウォーロックが言った。

「じゃあ行くよ！ とどめだ、グラビティアースレイザー！」

極太の重力のレーザーによって、ヴィーナスはテリートされた。

惑星の争い（前書き）

お久しぶりです。

今日から投稿始めようと思います。

惑星の争い

「……勝つた……」

スバルはその場にひざまずいた。するとアースがスバルの目の前に現れた。

「よく戦ってくれた、ロックマン、感謝しているぞ」

ミソラを抱えたアースが言った。

「……ありがとうございます……でも、なぜ他の惑星の守護者が地球に襲撃してくるんですか？」

「……それには理由があつてな……」

（始業式の前夜・太陽系中心部）

「そろそろ太陽系の電波の周波数も変えなければならぬな……ほぼ全宇宙で変えているからな……とりあえず地球と天王星からだ……より良い環境のために、いいな？」

「そんなことしたら、地球は人間がいなくなり、生き物のほとんどが消えてしまいます！」

アースは人類を守るために必死に反抗した。

「うるさい、お前は黙つていればいいのだが、アースよ……人類などいなくとも良いのだからな」

「ギャラクシー」とつて人間はどうでもいい存在だった。

「……でも、私にはできません、そんな事…」

「フフフ……それなら仕方ない、マークьюリーにやらせよつ……俺の命令に従わないお前にはレリード消えてもらおう……」

「攻撃を少しきらつたものの、すぐに、アースは眩しい光とともに消えてしまった。

「奴を追えつ！マークьюリー！周波数を変えないなら、奴の星もとも破壊してやれ……」

「……とこりわけだ……私のせいでこんな目に遭わせてしまってすまなかつた、ロックマン」

「別に気にしないでください、これで4回目ですから」

しかし、アースは暗い顔で

「あとは私がなんとかするから、安心してくれ、ロックマン」

と言つて去つてしまつた。

「……帰るぞ、スバル」

ウォーロックが言つた。

スバルはミソラを抱え現実世界に戻つた。

デートの終わり

事件の後、ミソラは公園のベンチで寝てしまっていた。そしてしばらくたち、

「……あれ？」

ミソラが起きた。

「「」は、ベイサイド中央公園だよ、ミソラちゃん大丈夫？」

スバルはミソラの事をとても心配していたようだった。

「私は大丈夫だよ…………って、もうこんな時間だ！ 仕事に間に合わない…………」

慌てて駆けて行こうとするミソラにスバルが言った。

「事務所には連絡しておいたから、平氣だと思つよ」

ミソラはこいつを笑い、

「さつすがスバル君…………つてことは、まだ一緒にいれるつてことだね、スバル君」

その後ミソラはたくさん買い物をした。そして6時頃になり、

「今日は大変だったけど、楽しかったね、ミソラちゃん」

とスバルが言った。

「今日はありがとう、スバル君」

ミソラもとても楽しかったみたいだ。

「じゃあね、ミソラちゃん」

と叫んで帰ろうとするといふ

「待って、スバル君」

ミソラが引き止めた。

「あ、あの、私、スバル君の……

その頃……宇宙では……

（太陽系中心部）

「帰つて来たか……アース」

ギャラクシーが言った。

「ああ、お前を倒すためにだ！」

と、アースが叫づが、ギャラクシーは軽く笑い、

「できるものならやってみたまえ

と言つた。

「ぐらえ！ アースグ……ぐわつ！」

アースが技を出そうとした瞬間、眩しい閃光がはしつた。

「トートの終焉」（後書き）

ちょっと中途半端なといひで終わらせてみました。

新たな刺客

「ぐりえ！ アースグ……ぐわつ！」

アースが技を出そうとした瞬間、眩しい閃光がはしつた。

「愚か者め……！」

アースはその場に倒れてしまった。

「ゆけ！ ダーク……スよ！」

ギャラクシーの前には謎の黒い電波体がいた。

「お前の力を、ロックマンに見せてやれ！」

謎の黒い電波体はうなずき、地球に向かつて行つた。

（ベイサイドシティ駅前）

「あ、あの、私、スバル君の……えーと、スバル君の好きなシュー
ティングスターの曲が入ったアルバムを出すから買つてね……じゃ、
じゃあね」

と言つて行つてしまつた。

「ミソラちゃん、何でそんな事で呼び止めたんだろう?」

(氣付いてねえのか……やっぱり、こいつは鈍感だな)

そして、スバルは家に帰つた。

一方ミソラは……

「結局伝えられなかつた……」

「まだチャンスはあるわよ、ミソラ」

ハープに励まされながらミソラは家に帰つていた。

～スバルの家～

「ただいま～」

あかねが二三二三しながら近づいて來た。

「今日のピート楽しかつた?」

「そんななんじやないってば～」

こつものようにスバルはからかわれながらベットに行き、寝た。

委員長の怒り

～スバルの家～

「行つてきまーす」

スバルはそう言つて学校に向かつた。

いつもとは違ひ、まだ時間は余裕だつた。

～「ダマ小学校～

「ふう～ 今日は早くついたね、ロック……」

不意に後ろから殺氣を感じた。後ろを振り返ると、委員長が立つていた。

「おはよう、スバル君……昨日は楽しかつた？」

「口では穏やかに言つてゐるが、内心怒つてゐるのは明らかだ。

「ま、まあ楽しかつたよ……」

言つた後にスバルは後悔した。なぜなら、委員長の怒りに火をつてしまつたからだ。

「ふ～ん……まあ、そりや楽しかつたでしちうね、人気アイドルと

のデータに私たちとの約束を断つてまで行つたんだものね……」「

スバルは、これは謝らないとやばいと思い、

「もう、いいわ！ 私たちより、ミソヒちゃんとの約束を優先する
なんて最低よ！」

委員長はかなり怒っていた。その日はその後一度も話をしなかつた。

放課後

「あの……委員長、そろそろスバル君と仲直りしたらどうですか?」

卷之二

「は、はい、すいません」

委員長はまだ怒っていた。

「スバル君も謝つたほうがいいよ」

海碧が言った。

「そ、うだよ、ね、やつぱり謝ひつ……」

そして委員長の近くに行き、

「昨日は本当にありがとうございました」

と、スバルは謝った。

委員長の怒り（後書き）

委員長は果たして許してくれるのでしょうか？

次は無い

「…………許さない…………と、言いたいところだけど、私は心が広いから、今回だけは許してあげるわ」

委員長があつさつ許してくれた事に皆は驚いていた。

「あ、ありがと」

スバルはほつとした。

「次やつたらどうなるか分かってるわね？」

「は、はい……」

次はやらないぞ、とスバルは心に誓つた。

「それはさておき、今度みんなでスピカモールに行かない？」

委員長が言つた。

「何しに行くの？」

と、スバルが聞くと、

「新しいイベント会場で、天地さんが講演会をするらしいの…………て、みんなもメール来てるでしょ！」

ハンターヴGを見ると天地さんからメールが来ていた。

「本当に……」

スバルが確認を終えると、

「というわけで、今週の日曜日の朝9時に改札で待ち合わせね、いい？」

「分かりました、委員長」

「おひ、委員長」

「分かったよ」

すると、委員長はスバルの方を向き、

「いいわね？」

と、念を押した。

「分かったよ、委員長」

そして、それぞれみんな家に帰つていった。

天変地異（前書き）

お久しぶりです。
また投稿を再開しようと思つて いるので、 お願いします。

（次の日の朝）

「ゴン太は相変わらず遅いわね！」

委員長は少しうだつっていた。

（やば……委員長怒ってる……）

それから5分くらいしてやっとゴン太が来た。

「遅いじゃないの！ 私を待たせるなんてどうしたことか分かっているの！」

しばらくし、委員長の怒りが鎮まつたところで、スバルたちは、スピカモールに向かつた。

（スピカモール）

新しいイベント会場に着いたスバルたちは天地さんのところに挨拶を行つた。

「みんな、今日は来ててくれてありがとう、いろいろと体験することができると思うから、楽しんでね」

「どういふことですか？」

スバルが聞いた。

「それは始まつてからのお楽しみだよ」

と言つて、天地さんは行つてしまつた。

（30分後）

「お待たせしました、これより、天地 守氏による講演会を始めます」

すると電氣が消え、天地さんが話を始めた。

「みなさん、今日はお忙しいなかのご来場ありが……」

突然天地さんの声が途切れた。そして他の声が、聞こえてきた。

「よく聞け、ロックマン、この天地とかいう奴の命は俺が預かる！返してほしけりや、この会場の電腦に来い！ 10分以内だ！」

声の主は、電腦の中に入つて行つた。するといきなり、体が重くなつた。

「な、何だ！？」

会場がどよめいた。

「くつ……体が重い……どうなつてゐんだ?」

息苦しさを耐えて、ウォーロックに聞いた。

「この辺りの重力が重くなつてゐみたいだな」

ウォーロックが言つた。

「天変地異でも起きたのかと思つた……そつちはどう？」

電波世界に影響が無いか心配したスバルが聞いた。

「こつちは大丈夫だ、少し電波が乱れているがな」

それを聞いて安心したスバルは電波変換をした。

(待)ていてください、天地さん！ すぐに助けてますから！

スバルが电脑に入れたとした時、会場で委員長の声がした。

「ノーマン・カーリー」

スバルは委員長の方を見た。
しかし、委員長は自分のいる側じゃ
ない方を見て、叫んでいた。

(どうしてだらう?)

疑問に思いながらも、天地さんを早く助けるためにはバルは電腦に入つた。

天変地異（後書き）

なぜ委員長は違う方向を向いたのでしょうか？

次回は戦闘です。

新たな敵”ダークアース”！

（イベント会場の電腦）

（早く助けなきや……どこにいるんだ？）

不意に声がした。

「奥で待っている……ロックマンよ」

スバルは走り出した。

「よしつ！ 行くぞつ！」

スバルは奥に進んで行った。今までよりウイルスは格段に強くなっていた。

「はあ……はあ……なんて強さだ……」

「待つていたぞ、ロックマン」

少し先に黒っぽい電波体がいた。

「天地さんを返せ！」

スバルは電波体に向かって走り出した。

「こいつを返してほしけりや、俺様を倒してみろ！」

電波体はよく見ると、どこかで見たことのあるよつたな形をしていた。

「『J』の戦いに天地さんは関係ないはずだ！」

スバルは怒っていた。

「関係なくとも、お前と戦うにはこうした方がいいと思つてな……さあ、いくぞっ！」

「……絶対に許さない……！ バトルカード、クリムゾンキャノン！」

ノイズの塊が相手に命中した。

「なかなかやるな……くらえ、ダークグラビトン！」

スバルは体が重くなるのを感じた。

「チッ……！ 『J』いつ、相当な電波体だぞ！」

「フンッ！ 当たり前だ！ 俺はギャラクシー様の忠実な僕、ダークアース様だ！」

スバルはやつと気がついた、この電波体の正体に。

「どうやら助けるのが他にもいたみたいだな！」

と、ウォーロックが言った。そしてスバルはソードファイターで猛ラッシュをしようとした。

「いぐそつー ソードファイ… ぐわつー」

スバルはカウンターを取られてしまった。

「くらえつー ナラグラビトンー」

スバルは自分にかかる重力に耐えきれず、ひざまずいてしまった。

「さりばだ、ロックマン……グラビティイレイザーー！」

新たな敵”ダークアース”！（後書き）

次回委員長が間違えた理由が分かります。

もう1人のヒーロー

「さらばだ、ロックマン……グラビティイレイザー！」

極太のレーザーがロックマンめがけて発射された。

「ゴバルトシールド！」

しかし、レーザーは突如現れたシールドによつて防がれてしまつた。

「ツ……何が起つたんだ……？」

スバルは閉じていた目を開けた。そこには自分を鏡に映したような蒼い色をした電波体が立つていた。

「き、君は？」

「僕はゴバルトロックマン……間に合つてよかつた」

スバルを助けたこの蒼い電波体はスバルを助けに来たらしい。

「詳しいことは後にして、まずはこいつを倒すよ！ 守りは僕に任せ、君は攻撃して！」

ゴバルトロックマンの声でスバルたちは戦いを再開した。

「仕方ない、まとめて倒してやろう！ グラビティウェーブ！」

しかし攻撃はコバルトロックマンによつて防がれた。

「今だ！ ソードファイター！」

連續攻撃によつて体勢を崩したところに今度はコバルトロックマンが追撃を仕掛けた。

「……なかなかやるな……現れる！ 電波獣アースケルベロス！」

すると、三つ首の禍々しい獣が現れた。

アースケルベロスとダークアースの攻撃はコバルトロックマンの守りを破り、2人に容赦なく襲いかかつた。

「……くつ！ どうすれば……つわつ！」

「僕に秘策がある……もつちよつと耐えていて、スバル君」

スバルは驚いた。

「何で僕の名前を知つているの！？」

しかし、答えを聞く前に、スバルは相手の攻撃によつて氣を失つてしまつた。

「とじめだ！ 究極奥義、ダークアースインパクト！」

「よし！ くらえつ！ コバルトリフレクト！」

ダークアースは自分の技を跳ね返された。すると大ダメージを受

けたダークアースの体が元の体に戻つて行つた。

「わ、私は何を……？」

正氣に戻つたアースが言つた。

「少し正氣を失つてたみたいですね……ここはもう大丈夫ですから、あなたも休んでください」

アースはかなりの傷を負つていた。

「ああ、ロックマン、ありがと」

アースはスバルとコバルトロックマンを勘違いしていたようだつた。

「僕はあなたが知つているロックマンではありません、こっちが本物です」

そう言つて、スバルの方を指差した。

「倒れているみたいだが、大丈夫なのか！？」

「コバルトロックマンは微笑んだ。

「大丈夫です、後は私に任せください」

アースはうなづくと、その場から消え去つて行つた。

「さあ、始めるか……コバルト……！」

もう1人のヒーロー（後書き）

コバルトロックマンとはいつたい何者なのでしょうか？
次回正体が明らかに！

ヒーローの正体（前書き）

今日はダメですね。

年末年始近くは、休ませてもらいます。

ヒーローの正体

「さあ、始めるか……「コバルトヒーリング！」

コバルトロックマンの手から蒼い光がスバルの胸元に当たられ、スバルを回復し始めた。

「……ぼ、僕は……？　あ……君はコバルトロックマン、助けてくれてありがとう」

「さて、僕の正体を話す時が来たみたいだね、スバル君」

この少年はスバルのことを知っているみたいだった。

「君は一体誰なんだ……？」

「僕は、荒海　海碧だ……僕は君のことを何回か助けた、青い稻妻でね……」

スバルはとても驚いてしまった。まさか自分の学校に電波変換できる人がいると思わなかつたからだ。

「どうして、海碧君が……？」

海碧は深刻そうに話を始めた。

「僕はこの星の人間じゃないんだ……僕はコバルト星という地球の環境に似ている星に生まれたんだ。僕の母さんは優しい人だつた。僕は母さんのことが好きだつた。でもあの日母さんはいなくなつて

しまつたんだ……地球人によつてね……僕の家は、他の星との貿易を行つていたんだ。そこで地球人の恨みを買ひ、さらわれてしまつたんだ。そして父さんはそここのグループのボス、Mr.キングとかいう奴に殺されてしまつたんだ……僕の目の前でね……そのときの形見がこのハンターVGなんだ……地球人との取引で手に入れたらしいんだ……

～事件の日～

「と、父さん！」

キングによつて海碧の父親はノイズにやられてしまつた。

「……海碧……俺はもうダメのようだ……俺の部屋の引き出しに、地球人からもらつた機械がある……
それを持って逃げろ！……」

そのまま碧海の父親は息を引き取つた。

「と、父さん……ぐすつ……」

碧海は駆け出し、父親の部屋に行くと、ハンターVGを持つた。すると、自分の首にかかっていた宝石とハンターVGが共鳴し、光りだした。ハンターVGを見るとさつきまでは無かつたはずの宝石が画面にあつた。碧海はそこを触つてみた。すると画面が光りだし、碧海は電波変換した状態で立つていた。

「……力が湧いてくる……」

碧海はキングのいた場所に戻った。キングはまだその場所にいた。

「そりゃ、君も電波変換できるのか……その姿、地球にいるあいつと似ているな……ハハハ、かかって 来たまえ！ そしてこのウイザードたちを倒してみたまえ！」

「絶対、負けない！」

碧海は何故か戦い方が分かつていた。

鮮やかに碧海はウイザードたちを『リート』していった。

「ほつ、なかなかやるな……さらばだ！ またいつか会おう！ ハハハハ！」

そう言つてキングは去つて行つた。もう一度と会えないと言つことを知らずに……

碧海の力！

「…………と言つわけなんだ」

スバルは碧海が自分以上の悲しみを耐えて生きて来たといつこと
が分かつた。

「碧海君…………こんな悲しい話をさせてしまつて、『ごめん』

しかし、碧海はあまり氣にしてないようだった。

「別にいいよ…………そつこえは何でスバル君はあんな強い奴らに狙わ
れてるの？」

スバルは起こつた事件などを、詳しく述べ碧海に話した。

「教えてくれてありがとう、スバル君……僕も力になるよ」

スバルは戸惑つた。自分以外の人を巻き込んではいけないと思つ
たからだ。しかし碧海は強い。

「…………」

「もし、良かつたら僕と戦つてから決めてくれてもいいよ」

碧海の言葉により、戦つてから決めることにした。

「手加減なしだよ、スバル君。でも『リート』まではしないよこ
じてね」

「（さすがに）アリートではないよ碧海君……） 行くよっ！ ソーデファイター！」

スバルの連続攻撃だったが、全て紙一重でかわされてしまう。

「遅い攻撃だね、スバル君。連続攻撃つていうのはこうこうものだよ！」

すると一瞬のうちに無数の傷がスバルの体についていた。

「クッ……これならどうだ、カマイタチ！」

この攻撃は碧海にダメージを与えた。

「僕の力をちょっとだけ見せてあげるよ」

すると碧海の体の色がきれいなコバルトブルーから銀白色に変わった。

「いくよっ！ バトルカード、スタンナックル！」

素早さは失われていたが、一撃の重みが全く違った。

「つ、強い……！ でもこの遅さなら……！ バトルカード、グレートアックス！」

スバルの巨大な斧での攻撃を碧海は避けられなかつた。しかし、碧海はその斧を片手で受け止めた。

「まだまだだね、スバル君……そろそろ終わらせてもらひつよ……これが僕の必殺技だ！ コバルト・ダイナマイト！」

青い光をまとった碧海が、スバルに突っ込んだ。そして大爆発が起きた。

碧海の力！（後書き）

ちょっと短くなっちゃいました。

新たなPGM（前書き）

あけましておめでとひいにゃーます。
今日から投稿を始めます。

碧海の攻撃によつて氣を失つてしまつたスバルは、病院に運ばれて行つた。

「……は……病院？」

スバルが部屋を見ていると、外から碧海の声がした。

「スバル君……入つてもいいかな……？」

「……いいよ」

すると、碧海が申し訳なさそうに入つて來た。

「……昨日は」「めん」

「別に大丈夫だよ、碧海君、心配しないでね」

そう言つて、スバルは碧海のことを許してあげた。

「……ありがとう、スバル君」

そして碧海は帰つて行つた。しばらくすると、今度はシドウの声がした。

「入るぞ、スバル」

そしてシドウがスバルの病室に入つて來た。

「スバル、大事な話がある。ちょっとついて来てくれ」

「で、でも僕はまだ……」

言い終わらないうちにシドウがスバルに言った。

「もう退院していいそうだぞ」

そして、退院したスバルは、シドウとともに研究室まで行つた。

「大事な話つて何ですか？」

「スバル、俺たちはあの後研究を重ね、惑星の欠片の力をコントロールできるようなプログラムを開発した。その名も、プラネットPGMだ。話つてのは、これをお前のハンターVGにいれる作業をするからハンターVGを少しだけ貸してくれないか、つていうことなんだ。貸してくれるか？」

「いいですよ」

スバルのハンターVGの中にプラネットPGMをいれる作業は、1時間くらい続いた。今までのプログラムよりデータの量がかなり多かつたためだ。

「…………やつと終わつた……スバル、これを使って地球を守つてくれ」

「はい、頑張ります」

そしてスバルは、家に帰り、みんなで2回目の退院パーティーをした。

消えた「タマ小学校（前書き）

ついに累計1万アクセス突破しました。ありがとうございます。
これからもよろしく願いします。
今日から新章突入です。

消えたコタマ小学校

（太陽系中心部）

「ジュピター、マーズを連れて来い」

「しかし……マーズは……」

「…………知っている、地球にいるのである。」 ジュピター、私の命令はマーズを連れて来いと言つただけだ……分かったな？」 ギラクシーが言つた。

「は、はい……では……」

ジュピターは地球へと向かつて行つた。

「ついでにロックマンも倒し、少しでもギャラクシー様のお役に立たなければ……！ まずはロックマン、お前からだ！」

（コダマタウン）

「今日から学校に行けるんだ……久しぶりだな……」

スバルは今日から学校に行けるようになったのだ。

「そんなに shinみりすることはねえだろ、スバル」

「そうだね、ロック」

そしてスバルは学校に向かった。しかし、学校は跡形も無く消えていた。

「……な、何で……そ、そんな……」

学校のあった場所は、何も無いただの平地になっていた。

「ど、どりこりこりだ……」

ウォーロックも呆然としていた。

「……す、スバル君……」

後ろで声がしたので、振り返ると、そこには傷だらけになつた碧海が立つていた。

「ど、どうしたのー?」

「……ハア、ハア……ご、ごめん、僕、守れなかつた……ハア、ハア……」

消えた「タマ小学校」(後書き)

次回は特別編にします。
ちょっと短くなってしましました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7316w/>

流星のロックマン4～the planet～

2012年1月5日22時50分発行